

フランス在住日系国際児と日本人母親は日本語継承にどのような意味を見いだしているか

村中 雅子

1. 研究背景

国際結婚者や国際児、つまり国際家族は二つ以上の言語が存在する多言語環境で生活している場合が多い。このような国際家族やそれをとりまく社会にとって、言語継承や言語教育は大変重要な課題であると言える。

中島(2001)は海外在住の日系児にとって一番強い言語は日本語ではなく、現地語である可能性が高いことから、彼らにとっての日本語を親から受け継いだ「継承語」として、母語や外国語と区別した。「継承語」学習者は多数派言語である現地語に対して、少数派言語として日本語を継承していくことになる。海外在住の日系国際児の日本語も「継承語」にあてはまると考えられる。

2. 先行研究

佐々木(2003)は継承日本語教育が抱える負の要因として次の点を挙げている。「放課後に接する言語で重みがない。(学習者自身にも保護者にも教師にも社会全体にも暗黙の価値判断がある。)」 「子供たちはなぜ日本語を学ばなければならないのかわからない。」

しかし継承日本語教育に関するこれまでの研究は子どもの言語背景や教育機関の実態調査が多く(中島 1988; ダグラス他 2003; 奥村 2005; 佐藤 2007)、日本語継承の当事者である親や子どもの意味世界を問うような研究はほとんど行われてこなかった。したがって佐々木(2003)が指摘するような言語に対する暗黙の価値判断や子どもの学習動機に関する問題は十分に検討されてこなかった。

一方、日系国際家族に関する研究では家族間言語や環境の多様性が指摘され、言語使用や継承には両親の志向性や価値判断、言語や教育に関する考え方が影響を与えていると指摘されているが(Yamamoto, 2001; Yamamoto, 2005; 鈴木 2004a; 鈴木 2004b; 鈴木

2007)、その志向性や価値観が社会との関わりを通してどのように形成され、また子どもとどのような相互作用が起きているのかは検討されていない。

3. 研究目的

本研究は、国際家族の日本人親と国際児を日本語継承の当事者とし、日本語継承という行為が当事者にとってどのような意味をもつのか、当事者は日本語を継承することでどのようなことを実現しようとしているのか、当事者の内的視点から検討することを目的とする。その際、単一主義志向の社会で、少数派言語として日本語を継承する日系国際家族に注目する。その理由は単一主義志向の社会では多文化・多言語社会に比べて、少数派言語の継承が困難であると考えられ、それを克服するという意味で重要だと考えるからである。よって本研究では次の2点の研究課題を設けた。1. 国際家族の日本人母親は日本語継承をどのように意味づけているか。2. 国際児は日本語継承をどのように意味づけているか。以上2点を当事者間の相互作用、社会との相互作用に着目して明らかにし、日本人母親と国際児それぞれにとっての日本語継承の意味づけについて、モデルを作成する。

4. 研究方法

本研究では日本語継承にどのような意味を見いだしているかを問うため、日本語継承に積極的な日系国際家族を対象とした。そしてフランス在住日系国際家族の日本人母親6名と国際児5名の協力が得られた。日本語継承に積極的であるかどうかは、日本語補習授業校に国際児を通わせている、または通わせていたことがあるかどうかで判断した。データは半構造化インタビューによって収集した。分析方法は構造構成的質的研究法(西條 2007)にもとづいた修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木

下 2003)である。

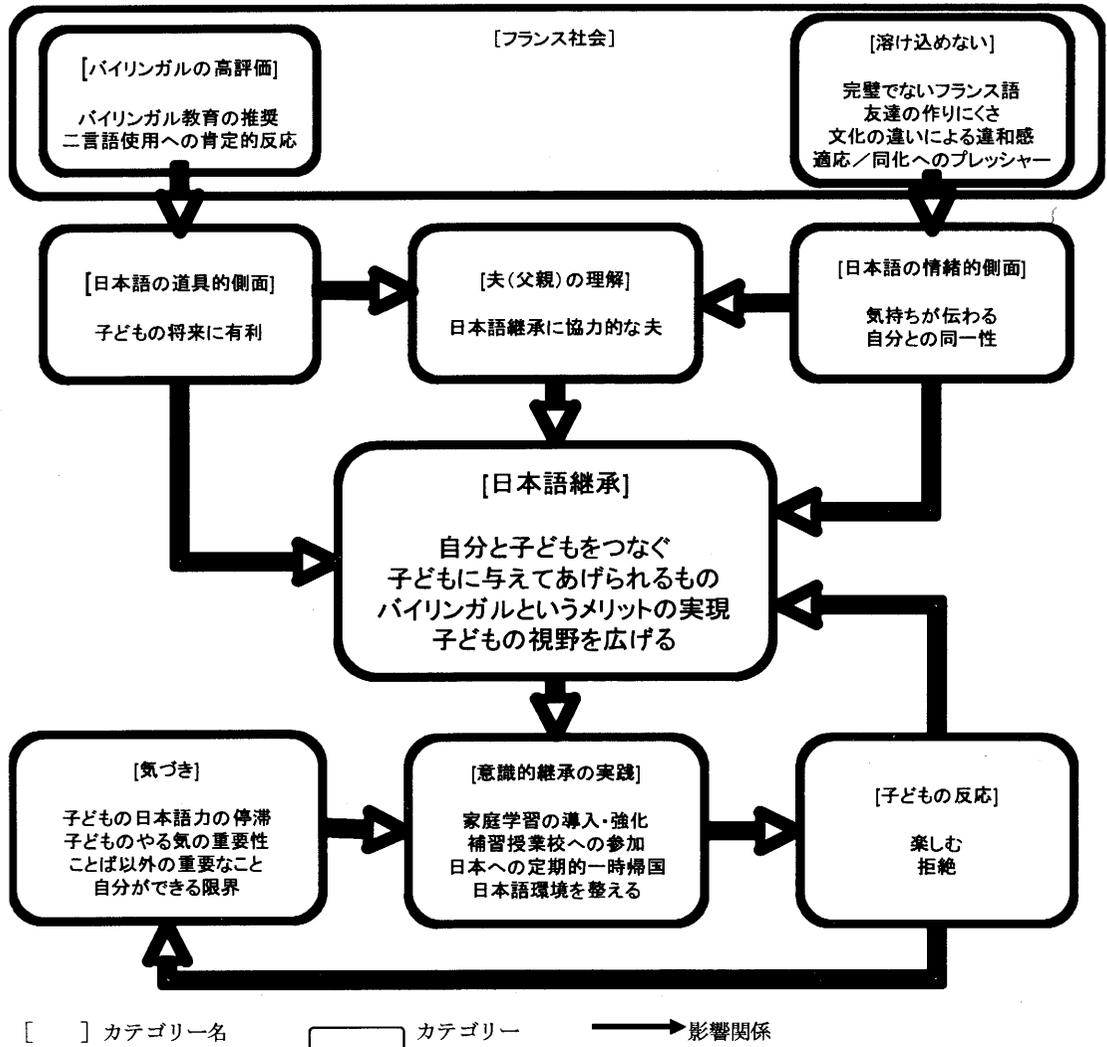


図1 日本人母親にとっての日本語継承

5. 結果と考察

構成したモデル図を提示して、結果と考察を述べる。文中の下線は概念、[]はカテゴリーを示している。

5.1 研究課題 1 日本人母親は日本語継承をどのように意味づけているか

日本人母親にとっての日本語継承の意味づけモデルが図1である。日本人母親は「フランス社会」で、二言語使用への肯定的反応とバイリンガル教育の推奨を受け、社会における「バイリンガルの高評価」を実感している。一方、自分の完璧ではないフランス語、友達の作りにくさ、文化の

違いによる違和感を憂慮し、適応/同化へのプレッシャーを感じて自分が社会に「溶け込めない」と感じている。そして社会の「バイリンガルの高評価」によって日本語を子どもの将来に有利な言語として捉え、「日本語の道具的側面」が意識される。一方「溶け込めない」実感によって、対照的に日本語こそが自分の気持ちが伝わる言語であると感じ、日本語と自分との同一性を見だして「日本語の情緒的側面」が意識される。この「日本語の道具的側面」と「日本語の情緒的側面」は母親に自分と子どもをつなぐ、自分が子どもに与えてあげられるもの、バイリンガルというメリッ

トの実現、子どもの視野を広げるといった〔日本語継承〕の意味を見いださせている。さらに〔日本語の道具的側面〕と〔日本語の情緒的側面〕に対する〔夫（父親）の理解〕を得て〔日本語継承〕の意味はさらに強められていく。この〔日本語継承〕の意味は家庭学習の導入・強化、補習授業校への参加などといった日本人母親の〔意識的継承の実践〕にも影響している。そして〔意識的継承の実践〕を受けた子どもはそれを楽しむこと

もあれば、拒絶することもあり、そうした〔子どもの反応〕はまた日本人母親に〔日本語継承〕の意味を再認識させている。それと同時に〔子どもの反応〕は日本人母親に新しい〔気づき〕を与え、母親は子どもの日本語力の停滞や子どものやる気の重要性などに気がつき、〔意識的継承の実践〕を調整して新たな実践へと移行する。日本人母親にとっての〔日本語継承〕の意味づけは以上のような動的サイクルの中で行われている。

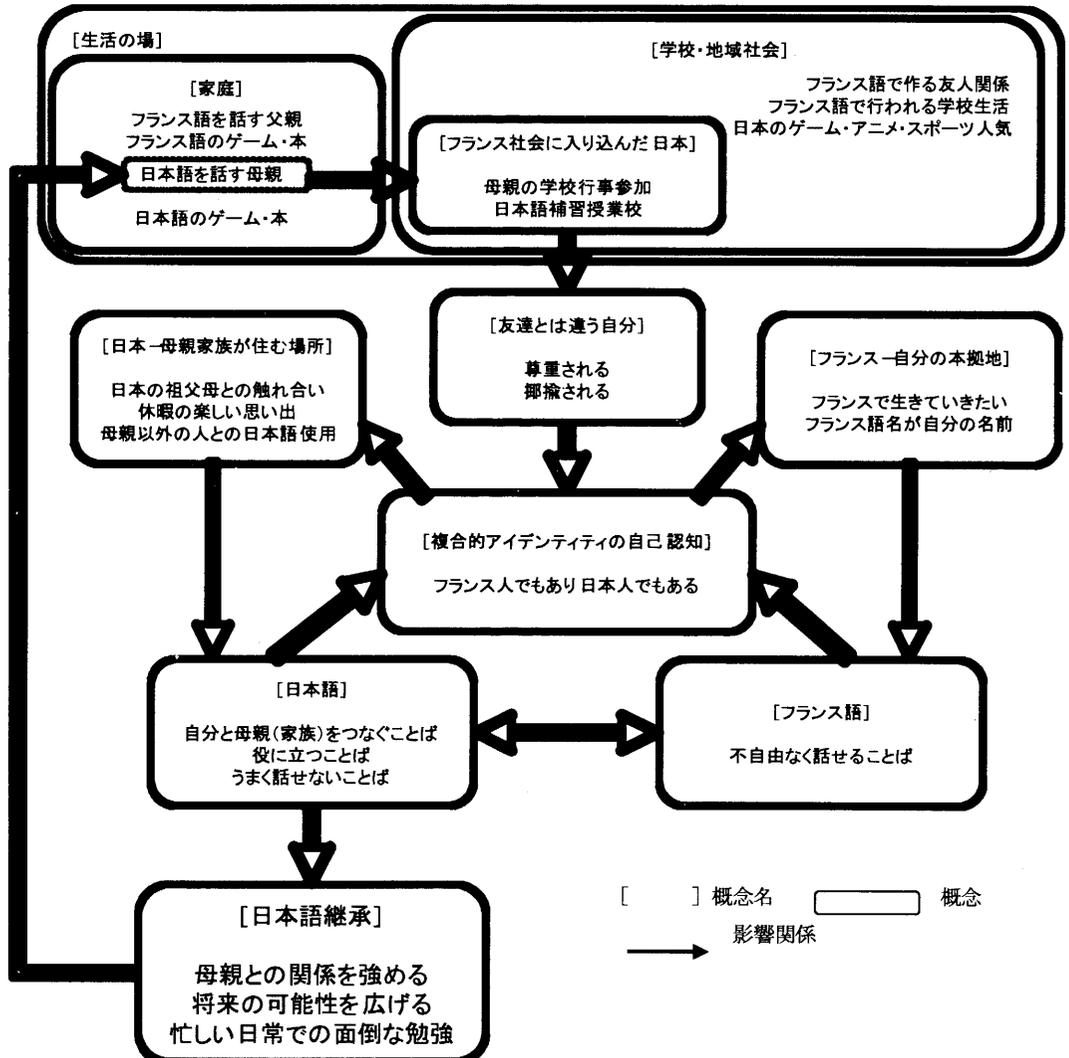


図2 国際児にとっての日本語継承

5.2 研究課題 2 国際児は日本語継承をどのように意味づけているか

国際児にとっての日本語継承意味づけモデルが図2である。国際児の〔生活の場〕は〔家庭〕と

〔学校・地域社会〕の大きく二つにわけられる。まず〔家庭〕にはフランス語を話す父親とフランス語のゲーム・本の存在がある一方で日本語を話す母親や日本語のゲーム・本の存在もあり、日仏

が混在している。一方、[学校・地域社会]にはフランス語で作る友人関係やフランス語で行われる学校生活があり、日本のゲーム・アニメ・スポーツ人気はあるが、フランス一色の環境である。日本語補習授業校や母親の学校行事参加は[学校・地域社会]の中では異質なものであり、[フランス社会に入り込んだ日本]を形成している。この[フランス社会に入り込んだ日本]によって国際児は自分が尊重される体験をすることもあれば揶揄される体験をすることもあり、その体験から[友達とは違う自分]を認識している。[友達とは違う自分]という認識は、フランス人でもあり日本人でもある国際児の[複合的なアイデンティティの自己認知]に作用している。[複合的なアイデンティティの自己認知]は国際児の日仏両国のイメージに影響を与えている。まず日本を[日本-母親家族が住む場所]と捉え、そこには日本の祖父母との触れ合いや休暇の楽しい思い出があり、また母親以外の人との日本語使用の機会もある。一方フランスについては[フランス-自分の本拠地]として捉え、今後もフランスで生きていきたい、フランス語名が自分の名前であるという自覚をもっている。そしてこの両国へのイメージは国際児にとっての[日本語]と[フランス語]の意味づけに影響している。[日本-母親家族が住む場所]は[日本語]の意味づけと作用し合い、自分と母親(家族)をつなぐことば、役に立つことばという概念が見いだされた。[フランス-自分の本拠地]は[フランス語]の意味づけに作用し、不自由なく話せることばという概念が見いだされた。そして[フランス語]の意味づけは[日本語]の意味づけと作用しあい、[日本語]にうまく話せないことばという概念を生み出している。さらにこの[日本語]と[フランス語]の意味づけによって[複合的なアイデンティティの自己認知]はより強められている。そして[日本語]の意味づけは[日本語継承]の意味づけにも作用している。[日本語継承]は国際児にとって母親との関係を強める行為であり、将来の可能性を広げるものでもあるが、同時に忙しい日常での面倒な勉強としても捉えられている。国際児が意味づけた[日本語継承]は日本語を話す母

親に影響を与え、母親は国際児の[日本語継承]の意味づけを受けて、より積極的に日本人・日本語話者としてフランス社会に入り込み、それがまた[フランス社会に入り込んだ日本]、国際児の[複合的なアイデンティティの自己認知]、[日本語]の意味づけに影響を与えている。国際児にとっての[日本語継承]の意味づけも動的なサイクルの中で行われていることがわかった。

参考文献

- 奥村三菜子(2005)「ドイツの日本語補習授業校における日本語教育に関する研究」東京学芸大学大学院修士論文 未公開。
- 木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文社。
- 西條剛央(2007)『SCQRM ベーシック編 ライブ講義 質的研究法とは何か』新曜社。
- 佐々木倫子(2003)「加算的バイリンガル教育にむけて-継承日本語教育を中心に-」『桜美林シナジー』1,25-38。
- 佐藤群衛(2007)。「日本人学校の子どもの実態と新しい課題-国際結婚家庭の子どもに注目して-」『東アジア地域における海外児教育の新展開に関する研究』平成16~平成18年度科学研究費補助金成果報告書 20-41。
- 鈴木一代(2004a)「国際児の文化的アイデンティティ形成をめぐる研究の課題」『埼玉学園大学紀要(人間学部篇)』4,15-22。
- 鈴木一代(2004b)「国際児」の文化的アイデンティティ形成-インドネシアの日系国際児の事例を中心に」『異文化間教育』19,42-53。
- 鈴木一代(2007)「国際家族における言語・文化の継承-その要因とメカニズム」『異文化間教育』26,14-26。
- ダグラス昌子, 片岡裕子, 岸本俊子(2003)「継承学校と日本語補習校における学習者の言語背景調査」『国際教育評論』1,1-13。
- 中島和子(1988)「日系児の日本語教育」『日本語教育』66,137-150。
- 中島和子(2001)『バイリンガル教育の方法 増補改訂版 12歳までに親と教師ができること』アルク。
- Yamamoto, M. (2001) Language Use in Interlingual Families :A Japanese-English Sociolinguistic Study, Multilingual Matter.
- Yamamoto, M. (2005) What Makes Who Choose What Languages to Whom? : Language Use in Japanese-Filipino Interlingual Families in Japan. *The International Journal of Bilingual Education and Bilingualism* 8, 6, 588-605.